

日本に欠けているもの

稲宮 健一

ある技術者団体主催の大手電機メーカーからサムソンに転職した人の講演を聞いた。彼のパワーポイントから韓国の最新の半導体工場の映像が写し出された。今や半導体の世界シェアの上位は韓国、台湾が占めており、日本の立ち位置はない。かつての高い位置を失ってから相当な期間が過ぎた。今でも日本は半導体製造装置などで高いシェア保持しているが、部分的に高度な技術を保有していても、半導体製造の全体を見通せる資質のある人材がすでに失われているとのこと。

振り返ると、一九八九年に「NOと言える日本」を書いた盛田昭夫、石原慎太郎の勢いは今ない。当時は回路構成が簡単な大量生産に適したメモリの市場で世界シェアが圧倒的に高かったので、著者等は天狗になって戦後の復活を喧騒した。しかし、その時期でも、半導体製品の中でも頭脳の役割りを果たすCPUは米国に握られていた。メモリはシリコン基板の上に如何に大量にメモリチップを焼き付けるかで商品価値が決まる。そのため、シリコン基板の面積を大きくすること、メモリチップの微細化を進めることが決め手だ。もう一つ、シリコン・サイクルと呼ばれている製品市況の大幅な変動がある。不況時でも、短期な損益の捉われず、果敢な投資を決断しないと、次の好況時の果実を得られない。

対策として、日本のメモリ業界は複数のメーカーを合併させ、公的な梃入れで励ましたがり切れず撤退した。同時期に韓国では財閥の創始者が不況時であっても、大きなリスクを負って次世代への投資を決断し、最新の製造環境を実現した、さらに日本から高給待遇で専門家をスカウトした。明治期の国内の財閥は相当強引な事業経営をし、産業資産の構築を行ったが、現在の日本に膨大な投資リスクを負って次世代を引っ張っていくための社会的合意は容易に実現できない。であれば、アマゾン、アップル、スペースXのようなゼロからスタートする全く新規な発想に挑戦する以外に解はない。